

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

出版物：キリスト教文明とナショナリズム：
人類学的比較研究（国立民族学博物館論集2）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 良男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005839

キリスト教文明と ナショナリズム

—人類学的比較研究(国立民族学博物館論集2)

杉本良男編

風響社 / 2014年 / 本体 5,000円 + 税



「文明の衝突」の根源に迫る

非ヨーロッパ世界における「キリスト教文明」による「近代化」の歴史過程とその帰結について検討、その功罪を人類学的視点から見直す。注目の論集。

風響社 国立民族学博物館

20世紀末から21世紀にかけて、世界規模で西欧近代主義的な世俗主義・政教分離主義への反動としての「宗教的なるものの復権」と、デジタル・メディアの普及による高度情報化とが急速に進行した。それは潜在していた宗教の政治性を顕在化させ、ときには暴力を発動させるまでに至った。こうした現象は西欧世界だけでなく、むしろ非西欧世界においていっそう鮮明な像を結んでいる。

こうした世界規模で進行している事態に関しては、あくまでも差異化を目的とする「比較」の方法がとくに必要である。それは、19世紀的な「本質」、「起源」を求める比較主義とは方向性が全く異なっている。人類学において「比較」はもっとも重要かつほとんど唯一の方法であったはずであるが、いわゆるポストコロニアル転回を契機に、本質主義批判とともに押し流されてしまった。

本論集は、国立民族学博物館共同研究「キリスト教文明とナショナリズム—人類学的研究」(2007年4月～2010年3月)の研究成果である。この共同研究は、フランス革命以後の世界におけるいわゆる「キリスト教文明」による「文明化」の功罪について、人類学的視点から批判的に比較検討しようとする目的で発足した。

人類学が伝統的に対象としてきた地域において、「文明化」は「近代化」とほぼ同義であり、社会はキリスト教との直接的間接的な関係によって大きな変貌を余儀なくされてきた。また、キリスト教それも近代的な「宗教」の概念化により、さまざまな信仰形態が「宗教」的な制度として固定化されてきた歴史もある。そして、近代「キリスト教文明」は「ナショナリズム」を実質的に支えながら世界を整理している。その結果、現在各地で大小の「文明の衝突」状況が起こっており、人びとの生活を根本から脅かしている。

本研究は、人類学が主として研究対象としてきた非ヨーロッパ世界における「キリスト教文明」による「文明化」の歴史過程とその帰結について比較検討し、最終的には「文明の衝突」問題を批判的に超克しようとする試みである。

第I部「現代と伝統」では、グローバル化が進展する現代世界における宗教の存在形態について論じた青木恵理子論文(インドネシア、フローレス島)、藤原久仁子論文(マルタ)、岡美穂子論文(長崎県海外地方)から構成されている。いずれも、現地調査に基づく個別事象を扱いながら、従来自明とされてきた「伝統宗教」、「邪悪」、「伝統」などの基本概念を再検討し、宗教研究の根本を問い直すようとする方向性を持っている。

第II部「ヴァーチャルとリアル」には、南アジア地域における宗教メディアと身体性に関わる、松川恭子論文(ゴア、演劇)、杉本良男論文(タミルナドゥ、聖地)、川島耕司論文(スリランカ、ペンテコスタリズム)を収めている。いずれも最新のメディアを利用しながら、古典的なナショナリズムとも深く関わる運動が取りあげられているが、そこでとくに現代宗教におけるヴァーチャルとリアルの問題が問い直されている。

第III部「平準化と多様性」には、オセアニア地域におけるキリスト教ミッションとナショナリズムとの関係について論じた白川千尋論文(ヴァヌアツ)、橋本和也論文(フィジー)、辰巳慎太郎論文(東ティモール)を収めた。オセアニアはキリスト教ミッション研究にとっては先進地域であるが、各論文ともに近代ナショナリズムの持つ平準化の論理が、多様な現実を覆い隠し、かえって新たな対立を生みだしている逆説を指摘している。

第IV部「二項対立図式の逆説」は、キリスト教とナショナリズムの現代的諸相を扱った高崎恵論文(在日外国人)、小林勝論文(インド、ケーララ)、窪田幸子論文(オーストラリア)を収めた。ここでも、近代的、先進的なキリスト教ミッションと、後進的な非キリスト教社会、という二項対立図式のもたらした逆説について再検討を迫っている。

編者がキリスト教文明に関する人類学的共同研究を主催しはじめてすでに20年を経て、世界の状況は大きく変動している。中でも「9.11」と「3.11」は人類の「文明」そのものを根底的に問い直す機会を与えた。このようなときに、「人類」学はその使命を果たしているのかどうか、あるいは果たしているのかどうか、について一度問い直すときが来ている。編者の非力により、具体的なイメージを示唆するには至っていないが、本書は、人類学の持つ現地調査を基盤にした批判理論としての側面を、つねに意識し続ける必要があることを示そうとした共同研究の成果である。

杉本良男

国立民族学博物館民族文化研究部教授。専門は社会人類学、南アジア研究。現在は、南インドにおける津波災害復興過程、ポピュラー・カルチャーとナショナリズム、インド農村社会の構造変動、などについて調査研究を行っている。主要業績に『インド映画への招待状』(単著 青弓社 2002年)、『スリランカを知るための58章』(共編 明石書店 2013年)、『朝倉世界地理講座 大地と人間の物語 4 南アジア』(共編 朝倉書店 2012年)など。